

## コラージュの形式的特徴と自己の関連

園田直子<sup>1)</sup>  
近藤朗子<sup>2)</sup>

### 要約

本研究は、コラージュを見る際に自己のさまざまな側面がどのようにコラージュの形式に反映しているかについて検討するための基礎的な研究である。大学生を対象に、コラージュと Sense of Coherence (SOC), 抑うつ, 特性不安の尺度との関係, およびコラージュの形式 (空白の多さ, 自分の有無), コラージュの評価 (現実性) との間の関係を検討した。結果より次のことが示された。(1) SOC の低さ, 抑うつ, 特性不安のいずれもコラージュによる自己表現の不全感と相関があった。(2) コラージュにおける現実性は「抑うつ」の高さと負の相関がある。(3) 特性不安が高いほど, 空白が少ない (重ね貼り, 多量の写真)。(4) コラージュの中に「自分がある」ことは SOC の適度な高さとの関係がある。これらの結果より, コラージュにおける「現実性」, 「空白のなさ」, 「自分の有無」は対象者を理解する上で重要な手がかりになるとと思われる。

キーワード: コラージュ, SOC, 抑うつ, 特性不安

### 問題と目的

コラージュ (collage) の由来は, 「のりで貼る」という意味のフランス語 *coller* という言葉である。写真, 絵や文字などを雑誌, 新聞やパンフレットなどから切り抜き, 紙に貼っていき作品を作り上げるという, 1912年頃にピカソやブラックたちが美術の世界に取り入れた表現方法である。このコラージュが心理療法に取り入れられたのは, 1972年のアメリカにおいて, Buck と Provancher により作業療法として用いられたのが最初であるとされている。この1972年代から精神科を中心に, 集団絵画療法の一技法として活用されてきた。日本においては, 箱庭のミニチュア化という考えを基にし, 1987年に森谷らにより徐々に心理療法として用いられるようになった。

コラージュは自己の何らかの側面を反映していると考えられているが, コラージュを分析的に見るために

はどのような観点をもってみたらいいのか, またコラージュの形式にはどのような特徴があるのか, またそれは何を反映しているのか, という問題はまだ整理されているとはいえない。本研究では, コラージュの内容分析ではなく, 空白の多さなどの形式上の特徴がそれを作成した人の自己イメージをどのように反映しているかを知るための基礎的な資料を得るため, 健康な大学生のコラージュを分析すること目的とする。

本研究の背景には園田・穴井・津田 (2003), 園田・穴井 (2003), 穴井・園田・津田 (2003) による育児期女性の心理的支援のための講座のプログラムの検討がある。これまで見出された知見によると, 育児不安と Sense of Coherence (SOC) (アントノフスキー, 2000) には相関があること, すなわち育児不安が高い者は SOC が弱いこと, さらに講座の終了後には育児不安および SOC の変化が見られる。この講座のねらいは, 自分の置かれている状態や自分の気持ちに気づ

1) 久留米大学文学部心理学科

2) 熊本市立五福小学校児童育成クラブ

き、自分の欲求や希望を表現することによって自己概念を再構成し、自分の持っている社会的・心理的資源を動因して現在の困難な状況に対処する能力を高めるきっかけを作ることであった。

講座は6週間に渡るもので、まずストレッチで身体をリラックスさせ、次いでグループワーク（KJ法）によって互いを知り合い、その後、個人ワークを2回おこなった。個人ワークのひとつは園田・穴井（2003）で紹介された「展望地図法」であった。これはKuhnら（1954）によって考案された20答法と概念地図法（Novak, J.D. & Gowin D. b. 1992）の手法を参考に、本講座の目的にあわせて園田・穴井（2003）が考案した手法である。過去・現在・将来の自分のイメージを短い言葉でカードに記述し、カードを白紙の上に配置して、それぞれの結びつきを書き込んでいくという方法であった。これにより、受講者は現在の自分が自分の人生の流れのどこに位置づけられ、また自分自身が現在をどのように意味づけているか（「今は自分の時間がない」「イライラしている」等）を把握することができる。また、過去と将来が現在とどのようにつながっているかということも視覚的・空間的に把握することができる。園田・穴井・津田（2003）では、SOCが弱い者は、展望地図において記述数が少なく、また記述同士のつながりがほとんどない、また現在・過去・将来がつながっていないということを見出した。特に過去と現在に「結婚・出産」を契機とした大きな断絶があり、そのために将来が描けないと思われた。すなわち、結婚・出産を機に仕事を離れ、家事育児に専念している女性の中には強い育児ストレスを感じ、閉塞的な状況におかれている者がいることが展望地図に明らかに反映されていた。

展望地図の見方については、園田・森川（2004）が大学生を対象に基礎的なデータを収集し、SOC、抑うつおよび時間的展望と関連があることを見出した。その結果、大学生は将来に対する希望は就職や家庭を持つことなどほぼ全員発展的で明るいことを述べるが、SOCが弱いものや時間的展望を持たないものは、過去や現在を肯定的にとらえておらず、将来とのつながりが希薄であることがわかった。これらの分析から、将来の展望をもつためには過去を肯定的にとらえ、現在が充実していることが不可欠であることが示された。

もうひとつの個人ワークが本研究の対象である「これからの私」をイメージしたコラージュであった。ここでは雑誌から切り抜いた写真を貼る「マガジン・フォト・コラージュ」（ランドガーデン、2003）の方法を

使用した。コラージュについての園田・穴井・津田（2003）の分析の結果では、SOCの強い者は「自分がある」（これが自分であると本人が示せるような人物の写真を、たいていは大きく中央に貼っている）こと、将来への希望や「～がしたい」という将来の欲求をあらわしたり、これまでの自分の履歴を物語ったりするようなさまざまなアイテムを貼っていることを見出している。しかしSOCの弱い者は、人物、とりわけ自分に対応するような人物を貼ることがなく、アイテムの数およびバラエティが少なかった。一方、穴井・園田・津田（2004）では、SOC尺度得点が高得点でも、講座終了後に得点が急低落する「硬いSOC」保持者は、重ね貼りが多く、全く空白がないこと、アイテム数が非常に多い上に未整理で「ごちゃごちゃしている」という印象を受ける「過剰で雑多」であるという結果を示している。

コラージュは心理治療にはしばしば使用されているが（森谷他1993、杉浦1994）、箱庭のように作成することを通じて自己表現することそのものに意味があると考えられており、上記のような「自分の有無」「重ね貼り」等についてコラージュをどのように解釈するのか、ということについてはまだ定説がない。また、治療に使われることから、なんらかの心理的問題を抱えている対象者に対して実施することが多く、コラージュそのものをどのように見るかということについてはあまり検討されていない。著者らは、講座におけるコラージュの分析や、受講者の感想（「私はこんなにたくさんしたいことや欲しいものがあったんだ」という驚きを伴う気づき）より、「これからの私」をテーマとするコラージュには言葉で表現する展望地図よりも無意識のレベルの人生に対する希望・期待・願望・欲求（時には不安や恐れなど）が反映されていること、また過剰なコラージュを作る人は、多くの欲求を持ちながら整理できていないのではないかという印象を持っている。さらに、コラージュにはいくつかのスタイルがあり、似たようなスタイルのコラージュの背景にはなんらかの共通した心理が反映しているのではないかと考えた。

本研究は、冒頭に述べたように、コラージュの中に自己がどのように反映されているのかを客観的に見る視点を得るための基礎的な資料を得るために、大学生を対象にコラージュの作成と同時にいくつかの心理的尺度を実施し、それらの関係とこれまで筆者が得たコラージュに関するデータとの関連を探索的に検討するものである。心理的尺度は首尾一貫感覚（SOC；

Sense of Coherence) 尺度, ベック抑うつ尺度 (BDI; Beck Depression Inventory), STAI 日本語版 (STAI; State-Trait Anxiety Inventory) の特性不安 (A-Trait) 尺度の3つの尺度を用いた。カラーージュを見る視点としては「空白の多さ」「自分の有無」, またカラーージュの作成は大多数のものが「楽しい」「好き」という感想を述べるが, まれに作成を苦痛に感じる被験者もいることから, カラーージュ作成に対する被験者の感想, また作成されたカラーージュを形容詞対 (園田・Leuers, 1996にもとづく) によって評定し, カラーージュの特性と他の心理的尺度との関連を検討することを目的とする。

## 方 法

**被験者** 大学生80名 (男16名 女64名) 大学院生5名 (男2名 女3名) 計85名 (平均年齢21.5歳)。ただし, 「自分の有無」の分析では大学生1名を記述内容不備のため省いた。

**調査時期** 2004年5月下旬から6月上旬

**カラーージュ作成と評定** ①カラーージュの作成。材料: B3の白紙, のり, はさみ, 雑誌。本実験では, マガジン・フォト・カラーージュ法を用いた。まず, 「これからの私」というテーマでカラーージュを作成することを伝えた。作りたい作品のイメージを思い浮かべ, 雑誌などの写真の中からそのイメージに合うもの, 自分の心ひかれるものを選び出して集めておく。見つからなかった人は実験者が用意した雑誌を使用してもらった。自分が選んだものを切り抜き, 台紙の上に配置する。配置ができたなら最後に糊で貼り付ける (完成までの時間は60~90分)。カラーージュ作成後, ①ふりかえりシートに答える。②自分のカラーージュの評定, ③二人一組になり, ペアの相手のカラーージュの評定を互に行った。

### ①ふりかえりシート

自分の作成したカラーージュについて, 次の7項目に答える。

- 1) 今回のカラーージュに「タイトル (題)」をつけるとしたら…。
- 2) 今回のカラーージュで自分自身はどこにいるかというところ…。  
(どこにいるかはっきりしている場合は, カラーージュの裏の該当場所に「私」と書いてください)
- 3) 今回のカラーージュで気に入っている (好きな) ところは…。
- 4) なぜ, そこが気に入っている, 好きかというところ…。

- 5) 今回のカラーージュをじっくり眺めるとどんな気持ちになるかというところ…。
- 6) 普段の生活の中で, そういう「気持ち」と, 同じような気持ちになるのはどんな時かというところ…。
- 7) 今回, カラーージュを作ってみての感想は…。

\*このふりかえりは自分の作ったカラーージュについて吟味するためのひとつのステップであり, 結果の分析に使用したのは「自分の有無」の回答のみであった。

### ②自分のカラーージュ評定 [自己評価] 得点が高いほど肯定的であるといえる

自分のカラーージュを見て, 下記の質問に対して対のどちらにあてはまるかを1~5の5件法で答える。1が左辺, 3が「どちらでもない」, 5が右辺に該当する。

#### カラーージュを作っているとき (作成中の気分)

- |                 |   |                 |
|-----------------|---|-----------------|
| 欲しい写真が足りなかった    | - | 欲しい写真が十分あった     |
| 集中しなかった         | - | 集中した            |
| 作るのがつらかった       | - | 楽しかった           |
| 最初イメージがわかなかった   | - | 最初からイメージがあった    |
| 最後までイメージがわかなかった | - | 最後にはイメージがわいた    |
| 予想外のものはない       | - | 予想しなかったものを貼った   |
| あらかじめ考えたものを作った  | - | 作りながら感覚的に作った    |
| 貼る場所に迷った        | - | 貼る場所は迷わなかった     |
| 紙を埋めるのが大変だった    | - | 写真が多すぎてあまるほどだった |
| 難しかった           | - | 難しくなかった         |

#### 私は自分のカラーージュを見て (カラーージュの評価)

- |             |   |            |
|-------------|---|------------|
| 嫌い          | - | 好き         |
| 不満である       | - | 満足している     |
| 気持ちにじっくりこない | - | じっくりする     |
| 自分が出てない     | - | 自分らしい      |
| 新たな発見はない    | - | 新たな発見がある   |
| 解釈できない      | - | 自分なりに解釈できる |

### ③ペアのカラーージュ評定 [他者評価]

ペアをつくり, 相手のカラーージュについて, 1~5の5件法で, 下記の質問に答える。

#### 相手のカラーージュの印象は

- |         |   |             |        |   |                |
|---------|---|-------------|--------|---|----------------|
| 意味不明    | - | 説明的         | 空白が多い  | - | 空白がない          |
| 変わっている  | - | 普通・日常的      | 防衛的    | - | 開示的 (自分を出している) |
| 抽象的     | - | 具体的         | 暗い     | - | 明るい            |
| 生活感がない  | - | 生活感がある      | 冷たい    | - | 暖かい            |
| 非現実的    | - | 現実的         | さびしい   | - | 楽しい・にぎやか       |
| まとまりがない | - | まとまり・統一感がある | 汚い     | - | きれいな           |
| テーマが不明  | - | テーマを感じる     | 不気味    | - | 気持ちがいい         |
| 未完成な感じ  | - | 完成度が高い      | 好ましくない | - | 好ましい           |
| こどもっぽい  | - | 大人っぽい       | 重い     | - | 軽い             |

[得点が高いほど肯定的であるといえる]

\*「空白が多い-空白がない」のみは別に分析した。

## 質問紙

①SOC (Sense Of Coherence) 日本語短縮版13項目  
アントノフスキーらによって開発され, 山崎らによ

り作成された日本語版 SOC13 項目尺度を用いた。SOC 尺度には、通常版の29項目と短縮版の13項目がある。このどちらにも把握可能感、処理可能感、有意味感の3つの要素を表す項目が約3分の1ずつ含まれている。1～7の7件法であり、13項目の総合得点は13～91点の範囲である。

② STAI (State-Trait Anxiety Inventory) 日本語版 特性不安 (A-Trait)

スピールバーガーら (Spielberger et al., 1970) によって開発され、清水・今栄 (1981) により作成された日本語版 STAI 特性不安尺度を用いた。

STAI 特性不安尺度は、不安傾向の個人差を表す尺度である。この尺度は、普段・一般にどの程度の状態かを「決してそうではない」「たまにそうである」「しばしばそうである」「いつもそうである」までの4段階で回答させる。順に1～4点を与える(逆転項目は4～1点)。

③ベック抑うつ尺度 (BDI ; Beck Depression Inventory)

ベックらに開発され (Beck et al., 1961 ; 1979), 林ら (1988a ; 1991) によって作成された日本語版を使用した。

ベック抑うつ尺度は、最近の1週間における抑うつ状態の重症度を評価する代表的な尺度である。抑うつ気分、失敗感、自己嫌悪などの21の主要な抑うつ症状から構成されている。気分や認知に重点がおかれてお

り、身体症状に関する項目は比較的少ない。0～3の4件法であり、どの項目も点数が高いほど症状が重くなるように作られている。選択肢ごとに直接症状が記載されている。21項目の総合得点は0～63点の範囲であり、高得点なほど抑うつの重症度が高いことを示す。ベック抑うつ尺度は、1つの項目に対し複数の選択肢への回答が許されている。本研究では、もっとも高い得点の回答を採用した。なお「特性不安尺度」および「ベック抑うつ尺度」は堀・松井 (2001) より引用した。

結果と考察

1. 全体の平均

SOC 尺度、特性不安尺度、抑うつ尺度、コラージュ作成中の気分、コラージュの評価の平均、標準偏差、最小値、最大値を表1に示す。

抑うつの平均得点は9.96と比較的高い値を示している。一方コラージュ作成中の気分の平均は35.53、コ

表1 全体結果 (平均値)

尺度	(得点範囲)	平均 (SD)	最小値	最大値
抑うつ	( 0-63 )	9.96 (6.98)	0	28
SOC	( 13-91 )	51.28 (9.68)	23	72
特性不安	( 20-80 )	45.11 (9.81)	24	68
作成中の気分	( 10-50 )	35.53 (6.17)	21	46
コラージュの評価	( 6-30 )	24.19 (3.56)	13	30

表2 コラージュの印象評定の因子分析結果

項目	明るさ	まとまり	現実性	共通性
12 暗い - 明るい	0.800	0.215	0.170	0.715
14 さびしい - 楽しい・にぎやか	0.707	0.039	0.078	0.508
13 冷たい - 暖かい	0.681	0.238	0.223	0.570
18 重い - 軽い	0.581	0.125	0.085	0.361
16 不気味 - 気持ちがいい	0.577	0.494	0.249	0.639
9 大人っぽい - こどもっぽい	0.546	-0.245	-0.200	0.399
11 防衛的 - 開示的	0.495	0.093	0.144	0.275
6 まとまりがない - まとまり・統一感がある	-0.099	0.878	0.088	0.788
7 テーマが不明 - テーマを感じる	0.126	0.608	0.187	0.420
8 未完成な感じ - 完成度が高い	0.042	0.586	0.076	0.351
1 意味不明 - 説明的	0.038	0.527	0.094	0.288
15 汚い - きれい	0.321	0.462	0.085	0.324
5 非現実的 - 現実的	0.105	0.104	0.829	0.709
4 生活感がない - 生活感がある	0.027	0.016	0.827	0.684
2 変わっている - 普通・日常的	0.111	0.172	0.577	0.375
3 抽象的 - 具体的	0.178	0.185	0.539	0.356
説明分散	3.005	2.483	2.273	7.762
説明率	18.8	15.5	14.2	48.5

ラージュの評価は平均24.19と比較的高い値を示している。これは、コラージュ作成は全体的には楽しいと感じられ、自分の作品に満足している傾向があることを示している。

## 2. 評定形容詞の因子分析

コラージュの印象を形容詞対で評定した評定〔他者評価〕の結果について、最尤解、バリマックス回転による因子分析を行った（表2）。固有値の変化の様子などから3因子を採用した。第1因子は暗い－明るい、さびしい－楽しい・にぎやかななどの負荷量が高いことから「明るさ」、第2因子はまとまりがない－まとまり・統一感がある、意味不明－説明的などの負荷量より「まとまり」、第3因子は生活感がない－生活観がある、非現実的－現実的などの負荷量より「現実性」と名づけた。第17項目好ましい－好ましくないは省いた。第10項目空白が多い－空白が少ないについては、因子分析に含めず、独立した尺度として扱うことにした。内的整合性は0.819と高い値を示した。表3に空白の少なさ、明るさ、まとまり、現実性の平均値、標準偏差、最小値、最大値を示す。

空白の少なさは平均3.42であり、平均値では空白は多くもなく少なくもない適度な量であると考えられる。

表3 評定結果の平均値

	(得点範囲)	平均 (SD)	最小値	最大値
空白の少なさ	(1- 5)	3.42 (1.31)	1	5
①明るさ	(7- 35)	26.27 (4.61)	15	34
②まとまり	(5- 25)	19.18 (3.42)	10	24
③現実性	(4- 20)	14.20 (3.96)	5	20

明るさの平均26.27、まとまりの平均19.18ともにやや高めである。全体的にはコラージュによい印象をもったことが示された。

## 3. 相関分析

SOC、抑うつ、特性不安、コラージュ作成中の気分、コラージュの評価、空白の少なさ、明るさ、まとまり、現実性の9項目間の相関を求めた（表4）。

(1) SOCと抑うつ ( $r = -.687, p < .01$ )、SOCと特性不安 ( $r = -.665, p < .01$ ) に比較的強い負の相関、抑うつと特性不安 ( $r = .659, p < .01$ ) に比較的強い正の相関がみられた。SOCは、抑うつと負の相関があるといわれている。本研究においても、比較的強い負の相関がみられた。

(2) コラージュの評価とSOC ( $r = .299, p < .01$ ) に弱い正の相関、コラージュの評価と抑うつ ( $r = -.388, p < .01$ )、コラージュの評価とSOC ( $r = -.276, p < .05$ ) に弱い負の相関、作成中の気分と特性不安 ( $r = -.182, p < .10$ ) に若干の負の相関がみられた。

SOCが高い人ほど自分のコラージュへの満足度が高く、抑うつや不安傾向が強い人ほど満足度が低いことがわかった。不安傾向が強い人は、作成中の気分がやや否定的である傾向が示された。

(3) 抑うつと現実性 ( $r = -.226, p < .05$ ) に弱い負の相関、特性不安と空白の少なさ ( $r = .213, p < .10$ ) に弱い正の相関がみられた。

抑うつの高い人はコラージュに生活感や現実的なものが少ないと考えられる。コラージュ療法では、

表4 尺度間の相関

		SOC	抑うつ	特性不安	作成中の気分	コラージュの評価	空白の少なさ	明るさ	まとまり	現実性
質問紙	SOC	-								
	抑うつ	(1) -0.687 **	-							
	特性不安	-0.665 **	0.659 **	-						
自己評価	作成中の気分	0.136	-0.179	-0.182 +	(4) -					
	コラージュの評価	0.299 **	-0.388 **	-0.276 *	0.655 **	-				
他者評価	空白の少なさ	-0.071	0.093	0.213 +	0.048	0.008	-			
	①明るさ	0.022	-0.070	-0.059	0.155	0.115	(6) -0.190 +	-		
	②まとまり	0.064	-0.084	0.075	0.031	-0.012	0.020	0.265 *	-	
	③現実性	0.160	-0.226 *	-0.127	0.083	0.166	-0.034	0.275 *	0.279 **	-

+ p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01

空白が多すぎることは何か問題があると考えが、あまりに空白がない（切り抜きを多量に貼る、重ね貼りが多い）場合も同様に「何か問題があるのでは」と考えるという。不安傾向の強い人のコラージュには空白がない（過剰）傾向がみられた。

(4) 作成中の気分とコラージュの評価 ( $r=.655, p<.01$ ) に比較的強い相関が見られた。コラージュの作成がスムーズよく進み、楽しめたひとほど、より自分の作品に満足している傾向があることが示された。

(5) 「他人から見たコラージュの印象」と「自分がコラージュ作成を肯定的に進められたか」に相関はみられなかった。

(6) まとまりと現実性 ( $r=.279, p<.01$ ), 明るさと現実性 ( $r=.275, p<.05$ ), 明るさとまとまり ( $r=.265, p<.05$ ), に弱い相関が見られた。空白の少なさと明るさ ( $r=-.190, p<.10$ ) に若干の負の相関が見られた。空白が少ないコラージュにやや暗めの印象をもつことがわかった。

#### 4. コラージュの中の自分の有無

コラージュの中での自分を、振り返りシート質問項目 2) 「今回のコラージュで自分自身はどこにいるのか」というと…」の記述内容より [特定の人] [複数の人] [動物] [人のキャラクター] [食べ物] [人がいるような場所] [単なる空間] [どこにでもいる] [いない] [コラージュの外] に分類した。[特定の人] [複数の人] [動物] [人のキャラクター] を「自分がある」, [食べ物] [人がいるような場所] [単なる空間] [どこにでもいる] [いない] [コラージュの外にいる] を「自分がない」とした。全体結果の人数および割合を表 5, 図 1 に示す。

テーマが「これからの私」であったことから、コラージュ内に「自分」があるが多いのではないかと考えていた。だが、自分がないコラージュが59.5%と、およそ6割であることがわかった。「自分がない」において1割以上であったのは、「単なる空間」が23.8%と最も多く、次に「コラージュの外」が11.9%, 「人がいるような場所」(実際には人物は貼られていないが家の中, 車の中などにいる) が10.7%であった。「自分がある」でもっとも多かったのは「特定の人」が21.4%, 次に多かったのは「動物」8.3%であった。全体では一番多かったのは「単なる空間」, 次に「特定の人」である。6割が「自分がない」ではあるものの、「自分がある」場合は自分を特定している割合が

表 5 自分の有無 (人数)

		人数 ( % )
自分がある	特定の人	18 ( 21.4 )
	複数の人	5 ( 6.0 )
	動物	7 ( 8.3 )
	人のキャラクター	4 ( 4.8 )
	自分がある合計	34 ( 40.5 )
自分がない	食べ物	2 ( 2.4 )
	人がいるような場所	9 ( 10.7 )
	単なる空間	20 ( 23.8 )
	どこにでもいる	4 ( 4.8 )
	いない	5 ( 6.0 )
	コラージュの外	10 ( 11.9 )
	自分がない合計	50 ( 59.5 )
全体の合計		84

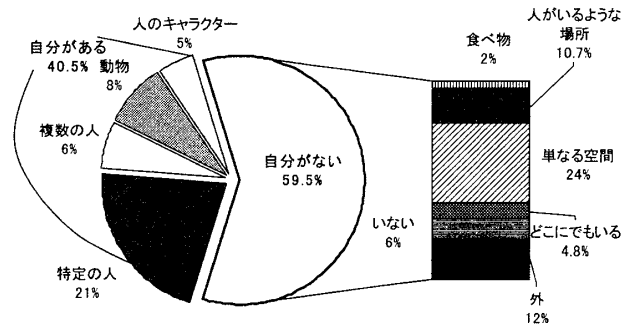


図 1 自分の有無の割合

高かった。実際、人物が貼ってある場合、「これはあなたですか?」とたずねるとほぼ全員、即座に「そうです」または「違います」と回答できる。このことから、貼ってある人物が自分かどうかということは本人にとって自明であることがわかる。またしばしば本人の雰囲気似ていながら同時に理想化されているような人物写真が選ばれることが多い。

#### 5. 自分の有無と SOC の関係

「自分がある」, 「自分がない」を全体と抑うつ尺度得点, SOC 尺度得点により分けた 5 つの群ごとに人数および割合で示す (図 2)。

抑うつ高群, 中群と低群では、自分の有無と特に意味のある関連が見出されなかった。SOC では、やや高群→中群→やや低群→低群と「自分がある」の割合が下がっている。やや高群では、54.5%と半数以上に「自分」がある。それに比べ、低群では27.3%と低い値を示している。SOC が高いほど、自己が認識できており、コラージュに自己を投影していると考えられ

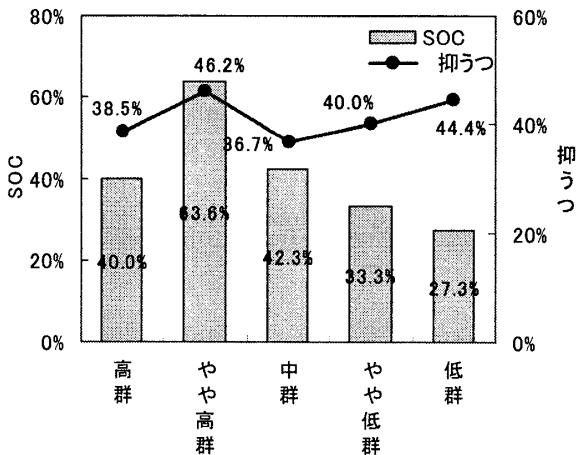


図2 「自分がある」割合 (SOC群・抑うつ群ごと)

る。高群については、38.5%と全体での「自分がある」40.5%に近い値である。高群はSOC得点が高すぎる「硬い」SOCであるため、自分がある割合が低かった可能性がある。

### まとめと考察

本研究は、健康な大学生を対象にコラージュのいくつかの特徴と心理的な特性との関連を検討した。その結果、(1) SOCの低さ、抑うつの高さ、特性不安の高さいずれもコラージュによる自己表現の不全感と相関があった。すなわち、SOCが低く、抑うつおよび特性不安が高い者はコラージュ作成が楽しめず、また作ることに困難を感じ、できあがったコラージュに対しても肯定的な感情がもちにくいといえる。大部分の被験者は「コラージュを作っている間は集中してとても気持ちがよかった」と報告するが、一部の被験者は何を貼っていいかが決まらずアイテムの選択に非常に時間がかかったり、欲しい写真がないと言ったりする。また配置がなかなか決まらない、できあがっても不満があることがある。SOCの低さ、抑うつや不安の高さが自己表現を困難にさせているものと解釈できる。(2) コラージュの印象の評定を分析した結果、コラージュにおける現実性の高さは「抑うつ」と関連していた。すなわち抑うつと負の相関があり、抑うつが高い者はコラージュの現実性や生活感が希薄であることがわかった。高抑うつ者は周囲にある現実や生活より、自分の内面世界に注意が向いていること、また欲求や不安が漠然としたイメージにとどまり、具体的な形で明確にとらえていない可能性がある。(3) 特性不安と空白の少なさに相関がみられたことから、特性不安が

高いほど、重ね貼りが多く、多量の写真を使用していた。コラージュを完成させるためには、用紙の広さに限界があるため、最後に貼りたい写真を取捨選択し、かなりの量のアイテムを捨てる決断をしなければならぬ。特性不安の高い者は多くの欲求や希望を持ちながらそれらを整理することができず「あれもこれも」という状態にすることがわかる。従ってまた空白があることに安心ができず用紙を埋め尽くす傾向があるといえる。(4) コラージュの中に「自分がある」ことはSOCの適度な高さと同関係があった。また抑うつとは関係がなかった。SOCは自分が主体的に生きている感覚と同関係があると考えられることから、コラージュの中に自分がある人は強い(適度な)SOCをもっているといえる。一方、最高得点のSOCの群では自分がある割合が低かったことから、最高得点の群に該当する者は「硬い」SOCの保持者ではないかと考えられる。コラージュに自分を貼る場合、自分自身の写真はないので、自分のイメージに近い、またほとんどの場合「好ましい自分の状態」のイメージに近い写真を選んで自分に置き換えるが必要になる。そのためには自分のイメージを客観的にとらえること、自分との距離がある程度とれていること、また「こうでありたい自分」のイメージが把握できていること、自分と他者との類似性と違いが明確に区別されていること、自分でない人物を自分であると読み替える柔軟性、など自己概念のありかたが問題になるであろう。

さらに、コラージュは投影法であるので、はじめから「自分を貼る」という意識はなされず、できあがったものを見た後に「これが自分だ」と気づかれることが多い。このときの気づきかたとして、被験者の回答を整理すると「自分の姿が(理想的な)他者の姿に置き換えられている」「自分はいるけれど人間以外の姿に投影されている」「自分はいると思うが、建物や車の中にいる」「自分はコラージュの中にいるが、具体的な形がない」「自分はコラージュの外にいてコラージュを見ている」「自分はどこにもいない」などのいくつかのレベルがあると思われる。SOCと同関係があったのは、「人物等の具体的な形を貼っている」ことであった。自分の有無が何を反映しているのかについてはさらに検討していきたい。

これらの結果より、コラージュにおける「現実性」、「空白のなさ」「自分の有無」は対象者を理解する上で重要な手がかりになると思われる。自分の有無に関しては先行研究の知見と一致していた。また、空白のなさが特性不安と同関係していること、現実性が抑うつと

関係していることは本研究によって新たに見出された知見である。

コラージュの特徴はさまざまな視点からとらえることができ、本研究で見出された形式上の特性はごく一部であると思われる。しかしコラージュの形式上の特徴から、作成者の心理的な特徴を推測する手がかりが得られたことは本研究の成果であった。

## 文 献

- 穴井千鶴・園田直子・津田 彰 2003 首尾一貫感覚からみた育児期女性(1)―育児不安との関連について― 久留米大学心理学研究, 2, 71-76.
- 穴井千鶴・園田直子・津田 彰 2004 Sense of Coherenceと育児期女性―コミュニティにおける心理的支援活動の視点から 日本理学会第68回大会ポスター発表
- アントノフスキー・アーロン, 1987 Unraveling The Mystery of Health (山崎喜比古 他 監修) 2000 健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム 有新堂高文社
- 堀洋道監修・松井 豊編 2001 心理測定尺度集Ⅲ 心の健康をはかる〈適応・臨床〉サイエンス社
- Kuhn, M.H. & McParland, T.S. 1954 An empirical investigation of self attitudes. American Psychological Review, 19, 68-76.
- ランドガーデン, H.B. 近喰ふじ子他訳 2003 「マガジン・フォト・コラージュ」 誠信書房
- 森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 1993 「コラージュ療法入門」創元社
- Novak, J.D. & Gowin D. b. 1992 (福岡敏行・弓野憲一訳) 子供が学ぶ新しい学習法―概念地図によるメタ学習― 東洋館出版
- 園田直子・穴井千鶴 2003 コミュニティでの活動: 育児期女性への心理的援助プログラム 津田 彰・坂野雄二編「医療行動科学の発展…心理臨床の新たな展開」現代のエスプリ, 至文堂 431, 178-190.
- 園田直子・穴井千鶴・津田 彰 2003 首尾一貫感覚からみた育児期女性の自己概念―自己概念の再構成課題による育児期女性の心理的特徴の分析― 比較文化研究, 31, 57-72.
- 園田直子・森川美希 2005 Sense of Coherenceからみた大学生の自己概念 久留米大学心理学研究, 4, 35-42.
- 園田直子・Timothy Leuers 2001 時間的展望における高揚された自己像―言語的自己と視覚イメージ的自己― 久留米大学文学部人間科学科紀要, 17・18合併号 61-69.
- 杉浦京子 1994 「コラージュ療法」 川島書店

## Relationship between the style of collage and self

NAOKO SONODA<sup>1)</sup>, AKIKO KONDO<sup>2)</sup>

### Abstract

The purpose of this study was to examine how various aspects of self were reflected in the style of collage. Subjects were University students. Correlation between the scores of Sense of Coherence (SOC) inventory, Beck Depression Inventory, State-Trait Anxiety Inventory and the style of Collage were examined. The results were; (1) Discontent with collage was negatively correlate with the Score of SOC and positively correlated with both scores of depression and anxiety significantly. (2) There was significant positive correlation between the evaluation score of reality of collage and score of depression. (3) There was significant correlation between the area of blank and anxiety. (4) Those who showed appropriately high score of SOC tend to paste the figure of themselves in their collage. These results show that "reality", "area of blank" and "existence of figure of self" of collage were important clue to understand the subjects.

**Key words:** collage, SOC, depression, anxiety

1) Faculty of Psychology, Kurume University

2) Jido-ikusei Club, Gofuku elementary school of Kumamoto City